HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	重障心身障がい児(者) 施設に勤務する職員のQOLの比較
Author(s)	伊藤, 紀代
Citation	日本看護管理学会年次大会講演抄録集, 11, 178
Issue Date	2007
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53408
Type	journal article
File Information	nihonkango-11-178.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

重障心身障がい児(者)施設に勤務する職員のQOLの比較

伊藤 紀代
北海道大学医学部保健学科看護学専攻　母性・小児看護学講座

【はじめに】

在宅用医療機器の発達は、障がい児の長命化に寄与し、超重症児と呼ばれる重い障害を持つ子ども達にも在宅で家族と過ごすことを可能にしてきた。これに伴い、養護学校をはじめ、医療施設以外での医療的ケア提供が求められる場面も増え、看護師不足を基盤とした人的資源の確保や、看護師のバーンアウトに対し早急な解決策が必要と考えられる。2005年3月、日本看護協会は「盲・聾・養護学校における医療的ケア実施対応マニュアル」を作成し、養護学校教員によるたんの吸引、経管栄養、及び導尿の補助の実施を容認した。そこで本研究では、Precede-Proceed モデルの第1段階である社会アセスメントとして、重症心身障がい児(者)施設で勤務する職員を対象とし、QOLを比較検討した。

【方　法】

2006年4～12月、了承の得られた重症心身障がい児(者)施設2施設において、看護師73名、療育士(介護福祉士・保育士等)44名、医療職(OT・PT・ST)15名に無記名の自己記入式質問紙を配布した。配布時には研究の意図が説明された文書を渡した。施設を介さず回収箱で回収し、倫理的配慮とした。質問紙の内容は、対象者の性別や年齢等の基本的属性、QOL尺度とした。

【結　果】

QOL尺度であるSF-8を使用し、どの項目も50点が2002年の日本一般住民のサマリースコアとなるようにそれぞれの項目に重み付けし、比較した。その結果、看護師群、療育士群、医療職群の3群において、それぞれ47.27、48.84、48.33と、3群とも日本一般住民のスコア平均よりも低値を示し、看護師が最低のサマリースコア平均を示した。また、看護師—療育士間では「健康感」と「活力」の項目において看護師群が有意に低く、看護師—医療職間では「社会生活」において看護師群が有意に低い結果となった。療育士—医療職間では、いずれの項目においても差は見られなかった。

【考　察】

調査結果から、重症児(者)施設に勤務する職員の中で、看護師のQOLが最も低いことが明らかとなった。2006年3月の健やか親子21の中間報告によれば、施設内・在宅を問わず病児支援の整備体制が不十分であり、都道府県、市町村、医療機関それぞれの役割の明確化が課題とされている。臨床経験のある看護師や、専門看護師等の専門教育を受けた者による監督のもと、授業中に実際に吸引が実施できる人員数の確保、異職種における教育・研修ラダーの整備や資格範囲の明確化といった資格制度の整備が今後の課題となってくると思われる。障がいを持ちつつ生きる子どもたちもまた、教育を受ける権利を有する存在であるという共通認識のもと、医療的ケアを必要とする子どもたちが安全で快適に暮らせる体制作りを共通目的とし、医療・教育の連携と協働が今後の課題と考えられる。